

## 学徒動員

久留米市 塚本 誠

昭和16年12月8日、太平洋戦争が勃発し、当時私は国民学校初等科6年で、登校中にこの開戦を知りました。

真珠湾攻撃の大戦果、あるいは南方各地域への進撃、占領等幾多の戦勝ニュースが国民を有頂天にさせ、街々では提燈、国旗を持つての行列で戦勝を祝った。国の政府首脳部は「大東亜共栄圏」「八紘一宇」とか精神訓らしい教育により着々と国勢を拡大していった。しかし、西太平洋・南方島々の激戦に対し、米国の科学・物量攻勢の前に、開戦以来半年余りで劣勢に向っていった。

戦況不利でも、大本営は情勢優位ニュースを伝え、また誰しもがそれを信じ、「勝利の日まで」を合言葉に、全国民死ぬもの狂いで頑張ったものでした。

昭和16年3月には小学校が国民学校と改称され、その後大学・専門学校・実業学校の卒業も3月から前年11月に繰り上げられ、学生も戦場への構想が進められたと思われる。こうした世界・国内情勢の臨戦体制の中で、国策も次々と厳しい制度・耐乏生活を国民に押しつけてきた。

主なるものは、衣料は点数切符制、砂糖や米の配給制（一人1日当り米2合3勺）、木炭の配給制、自動車のガソリン禁止で木炭車に改造、鉄製品等の強制的供出等々、以下多くの制約がかせられた。

昭和18年4月、八女工業学校（旧制中学）に入学した私は、土木技術を修得し、満州（現中国東北部）の広野をかけめぐる雄大な夢を描いていた。しかし、太平洋戦争の情勢は悪化の一途をたどり、毎日の授業も軍事教練が多くなった。当時、憧れの的であった『若い血潮の予科練の7ツ釦は桜に錨……』の歌で有名な甲種飛行予科練習生の夢は忘れられなかった。2年先輩の広松さんは予科練に入り、私には良く手紙を送って戴きました。でも終戦近くには音信も絶えたので、おそらく戦死されたのではないかと思います。

昭和19年、私達にも学徒動員令が下りました。先輩達は既に各地区に配置され、勤労働員中で、その苦勞はひそかに耳にしていた。

私達の動員先は、学校にほど近い軍需工場でした。八女中学校、八女高等女学校、長崎県佐世保工業など多くの勤勞学徒や女子挺身隊が動員され、上衣の腕には学徒動員の章をつけ、規律正しく毎日の重労働にもめげず、また食糧事情も極度に悪く米食も十分でなく、空腹で、栄養失調などで病気をしても与えられた任務はと、ひたすら国のためにの一念で皆頑張ったのです。

工場は鋳物工場、機械工場、鍛造工場、塗装工場などで任務に就いていた。私たち土木科の学徒は、主に鋳物工場に配置されたが、建物内はほこりや煙、熱風が立ちこめ、古鉄を電気炉やキュウポラで溶解し、型枠に入れ、軍艦に使用するバルブを鋳造する作業でした。

製品に至るまでの工程が大変で、起重機（クレーン）の油で頭から背中まで真黒になったり、

数百度に溶けた鉄の火花が散乱する中を走り回った。女子学生も旋盤と取り組んだり、60 kgの爆弾の塗装仕上げ等夜を日についで苦闘が続いていた。

しかし、戦局は一段と敗色濃厚となりつつある中、ある日旋盤などの機械を工場から疎開先へ移動中、数km先の路上で、女子学生が米のグラマン戦闘機の低空機銃掃射で若き命を散らした状況も内密の内に知らされたのでした。

工場上空も日増しに銀翼を輝かせたB29の編隊が通過し、近くの市街地、工場の空爆が頻繁に行われ、空襲警報のサイレンの響く日が多くなった。工場でも空襲に備え、防空壕掘りを学徒に命じた。地下5～6mまで縦穴を、それから横穴へと、人力による鍬、スコップ、バケツだけで数名で取り組んでいた。しかし先輩からは、日常茶飯事のごとく能率が悪いとか精神がたるんでいるとかで、横一列に並べられ、顔面をこぶしでなぐられたり、コークスの上に座らせられたり、ひどく活を入れられた。誰一人として不平不服を言う者もいなかった。これも国のためだと教育を受けた。

私の従兄は別の中学校でしたが、学徒動員は津屋崎の車運転短期訓練所で免許を取得させられ、大型トラックで資材、物資等の運搬動員に、また義姉は福島工試で風船爆弾の製作任務の学徒動員に従事したと、後日聞きました。戦局の大勢が決しつつある日、上空をB29の編隊が通過していたが、突然、大音響とともに飛行機の翼と胴体が別々に落ちて来た。地上で壕から抜け出し、密かに見ていた者は（私も）、B29が撃墜されたと思い、バンザイとさげんだ瞬間、翼には日の丸がついていた。墜落したのは工場より約2km北方で、少年飛行兵搭乗の戦闘機だったと聞いて、心が痛む思いがしました。

学校でも空襲に備え、学校防衛隊を編成することになった。近郊在住の生徒約10名で、昼夜を問わず警戒警報と同時に学校防衛のため駆けつけ、配置につくことになっていた。私もその一員で、昼は学徒動員で働き、帰宅しても警報が鳴れば（走って20分余）真夜中でも急遽集合しなければならなかった。その集合回数は実に百数十回にも及んだ。身も心も限界にきていたが、仕方がなかった。

終戦で授業再開となり、出席回数第1位で全校生徒の前で表彰されたことは今でも忘れられません。

国内戦に備えて婦女子も含め、竹槍訓練、消火訓練など悲壮な日々が続く中、サイパン島全滅、硫黄島玉砕、昭和20年4月米軍沖縄本島上陸と各地で壊滅的打撃を受け、沖縄県民の戦は、かのひめゆり部隊、神風特攻隊外、地獄絵巻のような話を聞くにつれ、目頭が熱くなる。

昭和20年8月6日広島に、9日には長崎に原子爆弾が投下された。（私達は落下傘爆弾と呼んでいた。）以後10日余りして、動員先の工場にて終戦の知らせを聞き、3年8ヶ月余りに亘る激戦も終止符が打たれた。

しかし、当時の全国民は、開放感より今後の日本は「国敗れて山河なし」のことわざのごとく流言飛語で混乱の続く中、徐々にではあるが復興へと立ち上っていったのでした。

最後に、今度の大戦で数百万の犠牲者を出した戦争を憎み、当時の苦労の想いを新たにする時、現在の恵まれた社会とはあまりにも対照的で、平和の有難さを痛感する次第です。